

「咄の会」活動記録

第 6 期

文責：世話人代表 山田敏之

第 32 回「咄の会」 — 講演と三味線実演 —

日 時：2017 年 6 月 2 日（金） 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：講演＝山本 進（芸能史研究家）

三味線実演＝金山はる（落語協会お囃子連）

参加者：36 名（うち女性 10 名）

懇談会：「侘助」（5 名参加－出演者は不参加）

「三味線音楽へのいざない」と題して、寄席囃子や三味線について学ぼうという変わった趣向です。寄席には欠かせない存在なのに、まず姿を見ることのないのがお囃子さんですが、今回は落語協会のベテラン金山はる師匠に三味線と唄をお願いし、お馴染み山本進先生の解説とともに、楽しみながら知識を得ることにしました。

第一部の講演では、寄席囃子は、お囃子さんの弾く三味線以外に、前座が大太鼓、メ太鼓、鉦（ヨスケ）、銅鑼、笛などを用いて演奏するもので、①儀礼的囃子 ②出囃子、③地囃子 ④ハメモノ その他 に分類できるという解説から始まりました。①は一番太鼓、二番太鼓、片シャギリ、仲入り、追い出し、

など、寄席の区切りを示すために用いられるもの。②はお馴染みですが、今のような形になったのは大正時代からとのこと。③は曲芸など色物の伴奏。④は音曲唄と呼ばれる落語の中で用いられるものです。江戸時代の書物の挿絵や、音声、写真、動画などを駆使し、該博な知識に裏付けられたわかりやすい説明はいつものとおりです。装置トラブルのせいで不完全ではあったものの、名人といわれた立花家橘之助、西川たつの貴重な映像や、音曲唄の例として春風亭昇吉の『紙屑屋』を鑑賞しました。

第二部は金山はるさんに、三味線の解説と出囃子や音曲を聴かせていただきました。三味線は中国の三弦（サンシェン）が琉球に渡って三線（サンシン）となり、それが日本に伝わり、幾つかの変化を加えて今日の形になったそうです。三味線はバイオリンなどと違って各弦の音程を歌い手や曲に合わせてさまざまに変えることができ、世界で最も演奏の難しい楽器ではないかとのこと。またその材料が猫や犬の皮、紅木という固い木、象牙などをはじめ、ワシントン条約で保護対象となっているものばかりで、動植物保護の観点からは世界で最も好ましくない楽器でもあるそうです。その後出囃子の幾つかを演奏したり、またその原曲を唄っていただいたりしました。出囃子の多くは歌舞伎の伴奏音楽である長唄をベースにしているそうですが、中には映画音楽、ポップス、童謡など洋楽系のものもあります。

最後は山本さんと金山さんの対談です。左の写真に見られるとおりぴったり息のあったやりとりで、金山さんがこの道に入られた経緯、修行の仕方、失敗談、その他いろいろな話を聞かせていただきました、中でも特記すべきは、金山さんの伴奏で、山本さんが「奴さん」と西川たつ伝の「えんかいな」の 2 曲を歌われたことで、まことに得難い望外の体験でした。録音装置を用意していなかったことが悔やまれます。

懇談会はお二人とも参加されず、聴衆側 5 人だけで「侘助」にて軽くビール 1 杯の会となりました。



第31回「咄の会」 ―落語―

日時：2017年4月7日（金） 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：柳家はん治（落語協会真打）

演目：『鯛』『妻の旅行』『猫の災難』

参加者：39名（うち女性6名）

懇談会：「笹の葉」（はん治師匠を含めて9名参加）



開設五周年記念として、柳家はん治師匠をお招きしました。

小三治師匠の三番弟子で、すぐ上の兄弟子が昨年4月の本会に出演いただいた故柳家喜多人師匠です。

一席目は桂文枝作の『鯛』。料亭の生け簀にいる鯛どうしの会話が主になる珍しい落語です。柳家小さんが狸の噺を演じるには狸の了見にならなくちゃいけねえと言った話は有名ですが、鯛の了見(?)で演じていただきました。この生け簀に20年前の開店当時から棲むという古株の鯛が、新入りの鯛に捕まらずに生き延びるコツを教えます。そして万一捕まって活作りにされても、天然ものの鯛の矜持を忘れず、痛みに耐え抜き決してジタバタしないようにと諭します。しかしその直後にこの古株が掬われてしまいます。残った鯛たちは新入りを助けようとして自らを犠牲にしたのだと感激し、その立派な最期を皆で見届けようとしします。やがて座敷に舟盛りが運ばれてきますが、客の「どうでもいいけどこの鯛はよく暴れるねえ」という一言でサゲになります。文枝は、客が動かない鯛を見てもっと活きの良い鯛を料理させ直そうとするのを知った古株が、瀕死の力を振り絞って暴れ出すという形で演じています。はん治師匠はそれをもうひと捻りして、幾ら口では立派なことをいっても、いざその場になればそんな綺麗ごとでは済まないという、ちょっとシニカルな含意を持つ奥深いものに仕立て直しています。

仲入り後最初の一席は、やはり文枝の創作落語の一つ『妻の旅行』です。定年を過ぎ子供も巣立ち、今は夫婦二人暮らしの亭主が、息子に向って女房の日ごろの行状をあれこればやくのが眼目の噺です。どこにでも転がっていきそうな風景で、聴いている人々の共感を誘い爆笑が絶えません。ここでも師匠はサゲをあっさりした形に変えています。ぼやきながらも長年連れ添った女房との深い絆が滲み出るような奥行が感じられます。師匠は一昨年奥様を亡くされていますが、その佛を偲びつつの大熱演でした。文枝は300席の落語創作を目指しているそうで、おそらくもう250席前後には達していると思います。『鯛』は1990年、『妻の旅行』は2003年の作ですが、このほかにも『ぼやき酒場』『背なで老いてる唐獅子牡丹』など、はん治師匠の手にかかると、原作とはまた一味も二味も違った魅力が感じられます。長井好弘は「東京かわら版」(2017.4)の中で、はん治師匠の文枝ものを評して、“…説得力はもしかしたら文枝以上かも知れない。はん治は「哀愁の落語家」なのである”と絶賛しています。

そのまま続いての三席目は、ネタ出しの『猫の災難』。隣家から猫のお余りの鯛の頭と尻尾をもらっ



たが、訪ねてきた兄貴分が尾頭付きの鯛と早とちりしたところから大騒動が始まり、サゲまで一気呵成。江戸時代から伝わる古典をきっちり本寸法で演じきった名演でした。自身もお酒が大好きだという師匠の飲みっぷり酔いっぷりは、いつもながら見事というしかありません。

懇談会は総勢9名。はん治師匠に落語通のゲスト二人も交えて「笹の葉」で賑やかに楽しく歓談しました。